
AIはどこまで脳になれるのか

心の治療者のための脳科学

岡野憲一郎著

遠見書房, 四六判 184 頁, 2,420 円, 2024 年 11 月刊

(京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授) 山中康裕

最初に断っておかねばならないことがある。それは、最終的な著者の立場と、書評している評者の立場が、全く同じ京都大学名誉教授だ、ということについてである。そういうことなら、必ず、「なれあい」か、「ほめあい」に終始して、真の書評など書けるはずがないからである。

しかし、今回、編集会議で評者がこれを引き受けたのには、そのような職場関係や師弟関係などは一切ないのだし、第一、評者が著者に会ったのは、ただの1回だけで、それも、本当に一般的な挨拶を交わしただけである。著者と評者との履歴を見てもえればすぐに知られる通り、彼ご自身は「一精神分析学者にして、一精神療法家」と自称しておられるが、誰が見ても知られるホンモノの生粋の第一級の学者であり、評者は純粋に「精神療法の一治療家」に過ぎず、たまたま、表向きには頭書の如き状態になっただけに過ぎないことをこそ知ってほしい。しかも、評者が書評を引き受けた理由は、純粋に「脳科学」の最近の急速な発展に目を見張り、「AIはどこまで脳になれるのか」という本書の取り上げている根本問題に、全く中心的な関心を持っていたからにすぎない。

さて、ここからが本論である。評者は寡聞にして全く気づいていなかったが、本書の各章はもともと雑誌に連載された12回分に、一書にする際に添削を施し加筆して纏めたモノなのだという。しかし、読んでいけばすぐに知られるように、著者はとても正直に書き始め、とてもまじめに論を展開させ、とても正直に本音を語っておられる。そして、現今の「脳科学」の発展のありさまを実にコンパクトにまとめ、例えば、Edelman Gや、Holmes J, Hebb DO, Kornhuber HH, Northoff Gらはもちろんのこと、安永浩博士や、Freud S, Winnicott DWに言及し、我が友・岸本寛史君や平尾和之君ら、時に評者と考

を共にしている人たちのNeural-Psychoanalysisに基づく考えなどにも触れつつ、論を慎重に展開しておられる。そして、AIが、いかに発達したところで、それは、著者の言う「心≠【心】」、つまり、決して、「AI」は、人間のこころを凌駕するところには至れない、という結論を導くのである。評者も、著者のごとく因果論にファミリーアーではないが、ほぼ同じ結論に近づくであろうと思われた。
